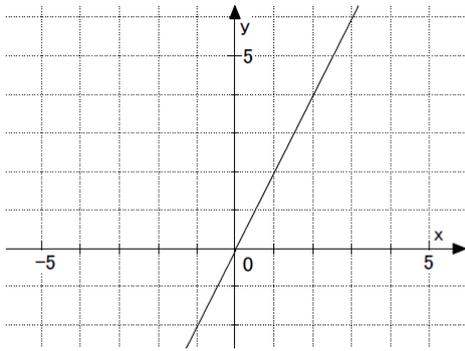


## 理系の用語としての「固有値」とは

下記のグラフは、 $Y=2X$  のグラフである。(と我々は教わる)。



が、実際には「数学の間」として、そうであるわけで、実際の応用では、事態は逆で

(-6.-12) (-4.-8) (0.0) (1.2) (2.4) (4.8) といった様な個別の値が先に存在する=観察点=固有値

ここに関係性を見いだすため  $Y=?X+?$  を想定する。ここでの?の値が恒数

恒数が無事見つかり (解ける関数) 片方の値で片方の値が出る状態を 「固有状態」 があるという。

本当は、状態が「固有状態」であるから、いつでも確実に同じ値が得られるのであって、同じ値が得られそうであるから、状態が「固有状態」であるとは言えない。

## 吉本の造語としての「固有時」とは

〈固有時〉は量子物理学の用語を真似てつくったものなんですね。個々にばらばらなものとしてあって、間隔のあいた点々としてしか表現されない値——ここで言う値はそのものの状態のことなんですからけれども——この値のことを量子物理学では〈固有値〉、ドイツ語ではアイゲンヴェルト (Eigenwert) っています。

〈固有値〉について簡単に言えば、物象なら物象の状態が、連続的にここからあそこへ行くのでは決してなくて、その物質なら物質に特有で固有の間隔が、それぞれの物質の間の距離感によって出来あがっている一連の値があるわけです。それは決して線上に連続してなにかひとつの意味を構成するのではなくて、むしろいくつかの点のようなものとしてある、そしてその点々の状態自体が物の状態なんですね。これぼつんぼつんと間隔のあいた点としてしか表現しようがないということだと思えるんですけど、〈値〉というのを〈時〉に代えればなんとかなるかもしれないと思って、ぼくは〈固有時〉と名付けたんだと思います。ただ、芹沢さんがいま言われたことで、それは違うと言っておかなければならないのは、これはおまえの個性なんだとか、おまえ固有の資質がこれを書かせているとは言えないってことなんですね。そういう風には言うことができないし、〈固有〉という言葉も、その人の個性だとかその人のものだという意味合いで使ったのではないんです。(中略)それは点々としてしか表すことが出来ない。そして点々が、時間として表現されるだけで、ある時間にはある場所の点にいて、また違う時間にはまた別の場所の点にいるわけです。その二点の間の場所にだっておまえは、いたはずじゃないかってことは、小さい微細な点を想定するともう言うことが出来ない。ここからトントンと別の点に移ったとは言えても、その間を線をつなぐようにして連続的に通ったはずじゃないかとはもう言えないんです。だからこれは間違っても個性のようなものではない。

その人の個性や固有の時間の流れ= 点と点を線として結んで作られるもの (いつまでも微分可能なもの)

固有時= 点 としてしか存在しえないもの (微分不可能なもの)

-----▶

(EX) 兎と亀のパラドックス

## 吉本の作家論的文脈

- 1 頭脳明晰の都市部の庶民階級出身
- 2 今氏乙治塾生
- 3 皇国少年 と その後の社会転換への戸惑い
- 4 労働運動の失敗
- 5 既婚女性との不倫から結婚へ
- 6 60年代安保への一兵卒としての参加

## 基本年譜

- 1946・6 詩誌『時禱』（荒井文雄）
- 1947・7 東京工業大学繰り上げ卒業
- 1949・9 荒井和子と知り合う 3 東京工業大学特別研究生入学
- 1950・8～12 『日時計篇』上
- 1951・1～12 『日時計篇』下 3 東京工業大学特別研究生卒業
- 4 東京インキ製造入社
- 1952・5 メーカー事件
- 6 「火の秋の物語」
- 8 『固有時との対話』（あとがきは5月）
- 10 「1952年5月の悲歌」
- 1953・3 労働組合連合長、工場組合長
- 9 『転位のための十篇』

## ※ベルグソンの純粋持続

現在（刹那論）>過去（空間化された時間）

VS カント「純粋理性批判」（時間＝アприオリな直観）

VS シェリング 過去の切断から克服によって「空間化」を超える

『時間を哲学する』（講談社新書、1996）中島義道 の 科学による時間議論の誤謬

- ①過去を時間一般と同一視する
- ②過去と未来を「ない」という点で同一視する
- ③現在を通過点として軽く扱う

※

現象学的思考

数学・物理学的思考

精神分析の知見（フロイトの翻訳）